

令和7年度 宮城教育大学学校推薦型選抜

専攻別課題

【初等教育専攻】

問題冊子

令和6年11月23日 午前9時45分 ～ 11時15分

注意事項

1. 問題冊子は表紙を含めて3枚、資料は表紙を含めて4枚です。問題は全2問です。
試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
2. 解答用紙は合計2枚です。問題の解答は、解答用紙の所定の欄に、必ず黒鉛筆
またはシャープペンシルを用いて記してください。
3. 問題冊子、資料、解答用紙に印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
4. 解答の下書き用に、白紙の下書き用紙を2枚配付します。適宜活用してください。
5. 問題冊子、資料、ならびに、下書き用紙は回収しません。

問1

資料1は、ベネッセ教育総合研究所が全国の小中高校の教員を対象に実施した学習指導に関するアンケート調査の結果をまとめた図の一部である。この資料1から読み取れる「2020～2023年の小学校にみられる授業のあり方と課題」について述べなさい。

問2

資料2は、認知科学の視点から「学び」について述べた、今井むつみ『学びとは何か ―〈探究人になるために〉』（岩波書店、2016年）からの引用である。あなたが、資料2に示された見解を踏まえながら（ただし、必ずしも著者の考えに全面的に賛同する必要はない）、小学校の学級担任として「探究型の授業」を行う場合、どのような授業を行うか。自らが実践する授業の内容や方法等について具体的に述べなさい。

令和7年度 宮城教育大学学校推薦型選抜

専攻別課題

【初等教育専攻】

資料

資料 1

※【調査概要】

(『小中高校の学習指導に関する調査 2023』4～5 頁参照)

- 調査機関：ベネッセ教育総合研究所
- 調査テーマ：GIGA スクール構想 3 年目における小・中・高校の学習指導の実態と教員の意識
- 調査時期：2023 年 8 月末～9 月中旬
(図 2 には 2020～2022 年に実施した同様の調査結果についても記載されており、4 年分の結果が記されている項目については、上から 2020 年、2021 年、2022 年、2023 年の順番に掲載されている。
なお、矢印 (→) は 2020 年から 2023 年に向けられている。)
- 抽出方法・条件
学校抽出：全国の小学校、中学校、高等学校のリストより、都道府県の教員数に応じた抽出確率で無作為に抽出
教員抽出：小学校は学級担任をしている教員が調査対象

※「資料 1」には小学校の調査結果のみ掲載

※学校および教員の有効回収数は以下の通り

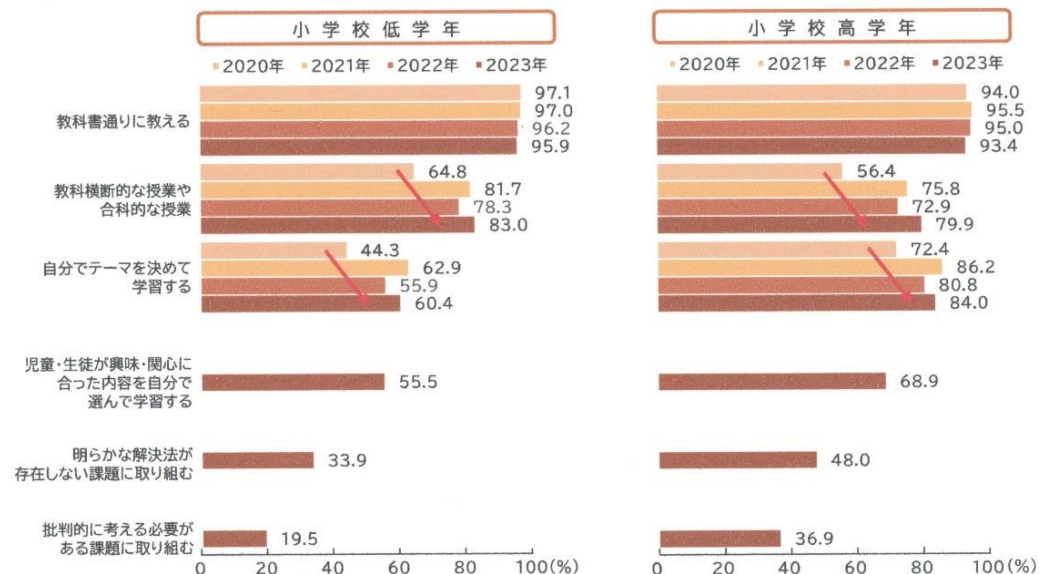
小学校：2020 年 (450 校)、2021 年 (737 校)、
2022 年 (932 校)、2023 年 (943 校)

小学校教員：2020 年 (1218 人)、2021 年 (2125 人)、
2022 年 (2884 人)、2023 年 (3012 人)

※「小学校低学年」は小学 1～3 年生、「小学校高学年」は小学 4～6 年生の学級担任をしている教員による回答を表している。

Q あなたは教科の授業において、次のような内容の授業をどれくらい行っていますか。

図2-1 教科の授業内容(経年比較)



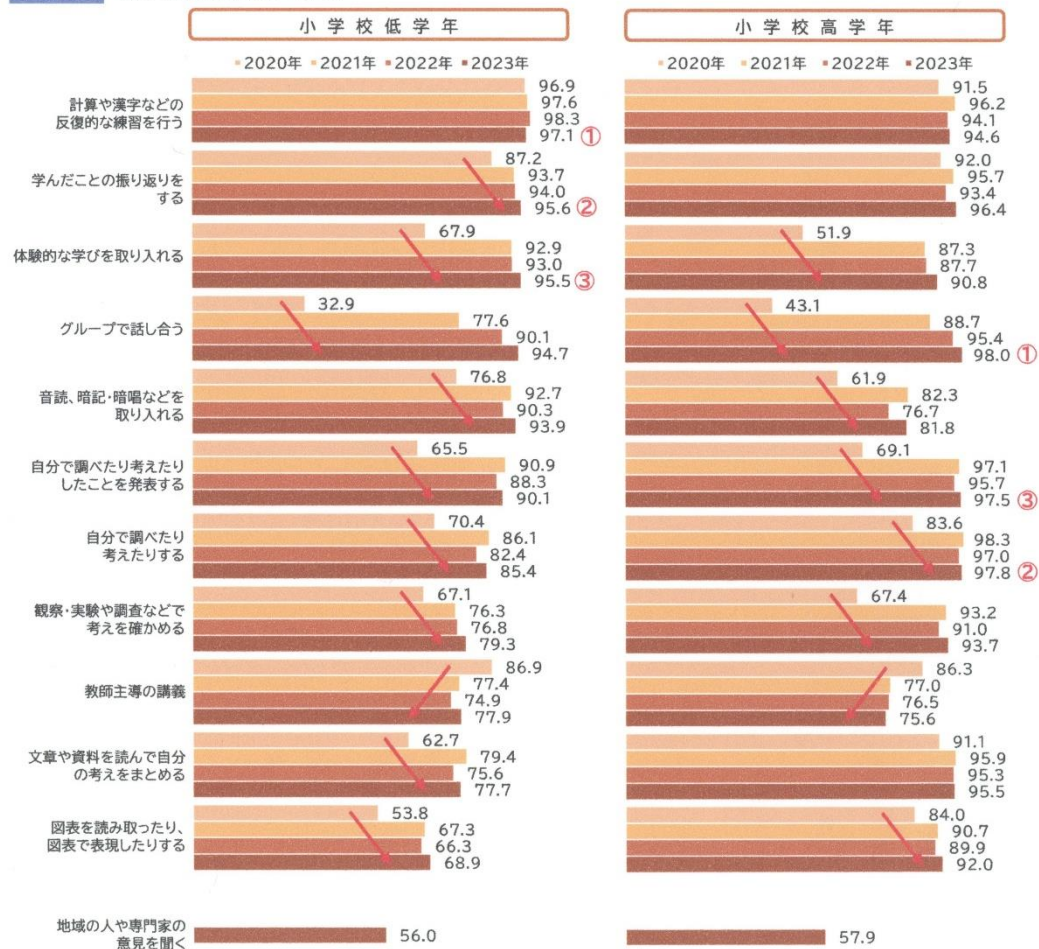
※質問項目は、2021 年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている。

※「児童・生徒が興味・関心に合った内容を自分で選んで学習する」「明らかな解決法が存在しない課題に取り組む」「批判的に考える必要がある課題に取り組む」は 2020 年～2022 年は尋ねていない。

※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。

Q あなたは教科の授業において、次のような方法の授業をどれくらい行っていますか。

図2-2 教科の授業方法(経年比較)



※質問項目は、2021年に、わかりやすさを考慮し、比較できる範囲内で文言の変更を行っている。

※「地域の人や専門家の意見を聞く」は2020年～2022年は尋ねていない。

※「学んだことの振り返りをする」は、2020年～2022年は「振り返ることを取り入れる」と尋ねている。

※「よく行っている」+「ときどき行っている」の%。 ※①、②、③は、2023年の比率の上位1～3位を示している。

Q 児童・生徒の資質・能力は、あなたの授業を通して、どれくらい高まっていると思いますか。

図3-6 高まっていると思う資質・能力(2023年、学校段階別)



※「とても高まっている」+「まあ高まっている」の%。

※小学校の降順に並べている。学校段階ごとに、比率が高いものから順に①～⑤をつけている。

以下、今井むつみ『学びとは何か―〈探究人になるために〉』（岩波書店、2016年）144～147・162～165・216～220 頁より引用。なお、本文中の「図 6-1」はドネルケバブの写真であるが、ここでは省略した。

資料 2

学びと熟達の認知のしくみを踏まえて、これからいよいよ、よりよく学ぶためにどうしたらよいかを考えていきたい。しかし、まだその前にもうひとつ、ふたたび考えなくてはならない大きなことがある。「知識とは何か」という問題だ。

だれもが多くの知識を得たい、役に立つ知識を得たいと思っている。そこでイメージする「知識」は驚くほど人によつて多様だ。しかし、どのように学べばよいのか、ということを考えるためには「知識とは何か」という問題を避けて通れない。知識に対する考え方、イメージが異なれば、自ずと学びの理想像とそのための学び方が異なってくるからである。

これからの世の中を生き抜くために大事なものは、論理的思考能力（批判的思考力と呼ぶ人もいる）だということを最近いたる所で耳にする。大学入試もそのような能力を問うことが求められるように変わるそう。しかし、論理的思考能力、批判的思考力などのことばは極めて抽象的で、きちんと定義されないまま、ふわふわと漂っているように思える。教育行政者、評論家や教育実践をする人たちの間でも、これらのことばを曖昧なまま、様々な解釈を許す形で使っている感じがしてならない。これは、思考力、判断力を束ねている「知識」の意味が、人によつてずいぶん違つて受け止められていることが根にあるからだと思う。

知識観、つまり知識についての認識（知識についてのスキーマ）のことを「エピステモロジー」という。本章では、これまで述べてきたことをベースに、「生きた知識とは何か」という問題を本書でこれまで述べてきたことに基づいて新たに捉えなおし、そこから「生きた知識」はどのように身につけ、よりよく学ぶことができるのかを考えていきたい。

1 知識観が学びを決める

「知識Ⅱ事実」という思い込み

知識は客観的なものであり、「事実」であると考えている人が多いと思う。例えば、「歩く」は英語では「walk」という動詞に訳すことができるという事実。天動説は誤りで地動説が正しいという事実。ニュートンが物体の運動に関する三つの法則（慣性の法則、運動方程式、作用・反作用の法則）を発見したという事実。フランス革命は、一八世紀後半、ヨーロッパに啓蒙思想が広がる中、絶対君主支配（アンシャン・レジーム）に批判が高まる時代背景のもと、市民の暴動に端を発して広がったという歴史上の事実。これらの「事実」が知識であり、それをたくさん覚えることが大事であるという認識が、現在多くの人に共有されている「知識についての認識」（エピステモロジー）であろう。

学びは受験のためではなく、大事なのは判断力、思考力だと主張する人でも、このエピステモロジーを持つている人はじつは多い。第3章で、人は多くのことで素朴に自分が培った思い込みを持つと述べたが、「知識Ⅱ事実」というエピステモロジーは、多くの人にとって非常に根強い思い込みの一つである。

どうしてこの思い込みが根強いのか？ ほんとうのところはわからないが、テスト文化の影響は否定できないだろう。どれだけ多くの「事実」を知っているかを問うことがテストでもつとも扱いやすいため、「事実」を覚え、それをテストで思い出して書き出す、ということを小さいころから習慣的にやってきたためかもしれない。私たち日本人は「覚えた事実の量」を評価されるというテストを小さいころからずっと受け続けている。こうした文化をもたない人々のエピステモロジーは、おそらく私たちとは大きく異なっているのだと思う。

知識のドネルケバブ・モデル

いろいろな人と知識について話をし、「知識Ⅱ事実」のエピステモロジーを聞くたびに私が思い浮かべてしまうのは、ドネルケバブである（図6-1）。ドネルケバブは肉片を集成してつくる巨大な竹輪のようなもので、トルコの伝統的な料理だ。

知識はきれいに切り取ることができる断片である「客観的事実」として存在し、その断片を人から教えてもらう。「知識Ⅱ事実」のエピステモロジーでの知識モデルは、「客観的な事実」

である知識片をぺたぺた表面に貼り付けていつて、ひたすら大きくしていくイメージを喚起させる。そこで私はこれを「知識ドネルケバブ・モデル」と呼んでいる。

(中略)

科学的思考を身につけるために

科学を学習する目的は、科学者によって発見された「事実」を覚えることではない。今日覚えた(その時には「真実」と思っていた)事実や理論が、一〇年後には棄却されているかもしれない。

科学はデータをもとに論理を組み立て、理論を構築するプロセスである。では、「科学を実践する」ために、子どもは何を学ばなければならないのだろうか？ 学校で、理科の時間などで実験をし、データをとり、分析する、という学習はしているだろう。しかし、それらは「科学を行う」ための要素に過ぎない。科学的思考ができるようになるために必要なのは、むしろ理論の検討のしかた、仮説の立て方、仮説の検討のための実験のデザインのしかた、データの解釈の仕方、結論の導き出し方、などの論理を組み立てるスキルなのである。

批判的思考とは何か

もちろん、ここでいう「科学」は自然科学に限らない。心理学はもちろんのこと経済学、法学、社会学のような社会科学も同じだ。さらに敷衍すれば、どのようなことであれ、単なる好き嫌いではなく、理にかなった意思決定をするために、(単なる「論理スキル」ではなく)前項の論理構築スキルに則った思考が必要である。

いま、いたる所で「批判的思考」ということを聞く。しかし、批判的思考の定義に関して、ほとんどの人はあやふやな考えしか持っていないようだ。さきほど述べたエピステモロジーの発達段階を提唱したディアナ・キューンは、「批判的思考」は「argue」する能力だという。「批判的思考」はもともと英語の「critical thinking」の訳である。そして、このことばと必ずペアになって使われる概念が「argue」という動詞なのである。

これらの言葉はどちらも翻訳がとて難しい概念で、実際、多くの日本人はどちらのことばも誤解して捉えていると思う。ある英和辞典では「argue」は「論じる、論議する、論争する」が第一の語釈になっていて、第二の語釈として「口論する、言い争う」がある。この語釈のために、「argue」という語によいイメージを持つ日本人は少ない。しかし、これらの語釈は「argue」という言葉の本質をまったく表していない。

英英辞典の方がこれらのことばのものと意味に近い語義を与えている。例えば、オックスフォード学習者英英辞典では、「Give reasons or cite evidence in support of an idea.」とある。ここに出てくる「evidence」という言葉が非常に大事なキーワードである。「argue」とは、ある考えがあつたら、その正当性を打ち立てるために「evidence」(証拠)を積み上げて論理をつくっていくという意味なのである。

(中略)

話を戻すと、批判的思考とはつまり、前項で述べた科学的思考と基本的に同じで、ある仮説、理論、あるいは言説を、証拠にもとづいて論理的に積み重ねて構築していく、思考のしかたのことを言う。単に「感情にとらわれず客観的にものごとを考える」とか「多角的に物事を検討する」ということではないのだ。

このような科学的思考、批判的思考のバックボーンになっている仮説検証のプロセスと理論構築のプロセスはもちろん、本で読んだだけ、あるいは誰かに説明されただけでは理解できない。知識(理論)を構築していく実際の道筋がわからないと、様々な仮説を適当に立てるだけで終わってしまう。自分で仮説を考え、実験をデザインし、データを取って分析し、吟味し、論を構築し、それを評価する。「批判的思考」はこのようなプロセスを何度も繰り返し経験すること、つまり、「体で覚える」ことによって初めて体得できるのである。

※なお、「敷衍」とは、意味・趣旨などをおし広げて詳しく述べること、たとえばなどを用いてやさしく述べることである。

批判的思考(科学的思考)とエピステモロジーとは互いを支え合い、互いを引っ張り上げながらともに発達する。知識ドネルケバブ・モデルのエピステモロジーを持つていたら、批判的思考は習得できないのは改めて言うまでもないことだ。だから、思考力を養うためにはエピステモロジーを発達させ、成熟したエピステモロジー、つまり評価・構築主義のエピステモロジーを持たなければならないのである。

(中略)

自由放任では探究人は育たない

昨今、「批判的思考」と並んで「アクティヴ・ラーニング」(主体的な学び)ということばが教育界のキーワードになっている。先生の言うことをおとなしく座って受動的に覚える学びではなく、子どもが主体的に学ぶことが大事なことだ。これは本書でここまで述べてきた探究エピステモロジーと完全に軌を一にする概念である。ただし、それをどのように実現するかという点では必ずしも一致しないようだ。遊びや学校の学びの中で、子どもが自分で発見することが大事という点、すべてを子どもに任せて放っておくのがいちばんよい、という誤解をされやすい。しかし、それは違う。例えば、幼児にブロックや粘土など特定の機能や目的をもたない玩具をそのまま渡すだけでは、子どもは何をしてよいのかわからず、興味をもつことができずに放り投げてしまうだろう。

(中略)

どのような遊び、どのような絵本を選ぶのかは、子どもの発達のレベルによって変わっていく。子どもの発達に合わせ、子どもが最も楽しみ、想像をはたらかせ、探究できる遊びや絵本を選ぶかは、親のセンスが最も問われるところだ。細部は決めすぎず、子どもに任せながらも大事な枠組みは親が決めることが大事なのだ。そのために、親は子どもの理解のしかたや楽しみ方を考え、子どもの個性と発達の段階に適した、いっしょにできる遊びを考える探究人でありたい。

知識の深さと広さを得るために

学校での学びも同じだ。幼児期の学びと児童期以降の学びで大きく違うところは、日常生活場面ではなく、学校という文脈で習得しなければならない知識が格段に増えることだろう。国語、算数、理科、社会、英語などの教科ごとに分かれた膨大な量の「知識」を学ぶことになる。できるだけ大量の知識を「教えよう」「教わろう」というエピステモロジーを教える側、教わる側の双方が持つていると、知識の断片(事実)と考えられていることをとにかく「覚える」というドネルケバブ・エピステモロジーに必然的に行き着いてしまう。そうならないようにするためには、狭い範囲の分野だけを深掘りすればそれでよいというわけではない。知識に幅がなければ、様々な状況で使える知識がない(足りない)ことになってしまう。知識のシステムを構築するためには広がり、深さのどちらも必要なのだ。

そこで、児童期以降の学びでは時間の使い方がカギになる。いったいどうすれば、好きな学校外の活動の時間も運動する時間も十分な睡眠をとる時間も確保しつつ、知識の広がり、深さを得ることが可能になるのだろうか。それには、子どもが自分自身で学ぶ力を身につけるしかない。そもそも、学校でどれほど幅広くいろいろな分野をカバーしても、技術や求められる知識が短期間にどんどん進化していく現代社会では、必要な知識は自分で身につけ、自分を進化させていくしかない。ドネルケバブ・エピステモロジーでこれからの世界を生き延びていけないことは明らかだ。

探究エピステモロジーをもち、ずっと学びつづける探究人を育てるために何をすべきか。まず第一に、学校は「知識を覚える場」ではなく、知識を使う練習をし、探究をする場となるべきだ。知識を使う練習とは、持っている知識を様々な分野でどんどん使い、それによって、新しい知識を自分で発見し、得ていくということである。それこそがアクティヴ・ラーニングの本質である。

令和7年度宮城教育大学学校推薦型選抜

専攻別課題
【特別支援教育専攻】
問題冊子

令和6年11月23日午前9時45分～11時15分

＜注意事項＞

1. 問題冊子は表紙を含めて4枚です。試験開始の合図があるまでは問題冊子をひらいてはいけません。
2. 解答は、問題用紙とは別の解答用紙に記入してください。
3. 解答用紙は2枚です。問題の解答は、解答用紙の所定の欄に、必ず黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入してください。
4. 問題冊子・解答用紙の印刷に不鮮明な箇所があった場合には申し出てください。
5. 解答の下書き用に白紙の下書き用紙を2枚配付します。適宜活用してください。下書き用紙は回収しません。
6. 問題文中に、「○字以内」という字数提示がある場合、字数には句読点も含まれます。

次の資料は、独立行政法人日本学生支援機構が、令和5年度(2023年度)における大学、短期大学及び高等専門学校(以下、大学等)における障害のある学生の修学支援に関する実態調査の結果を概要として示したものである。この資料を読んで後の問いに答えなさい。

独立行政法人日本学生支援機構では、全国の大学、短期大学及び高等専門学校を対象に、障害学生の修学支援に関する実態調査を実施した。

I 調査概要

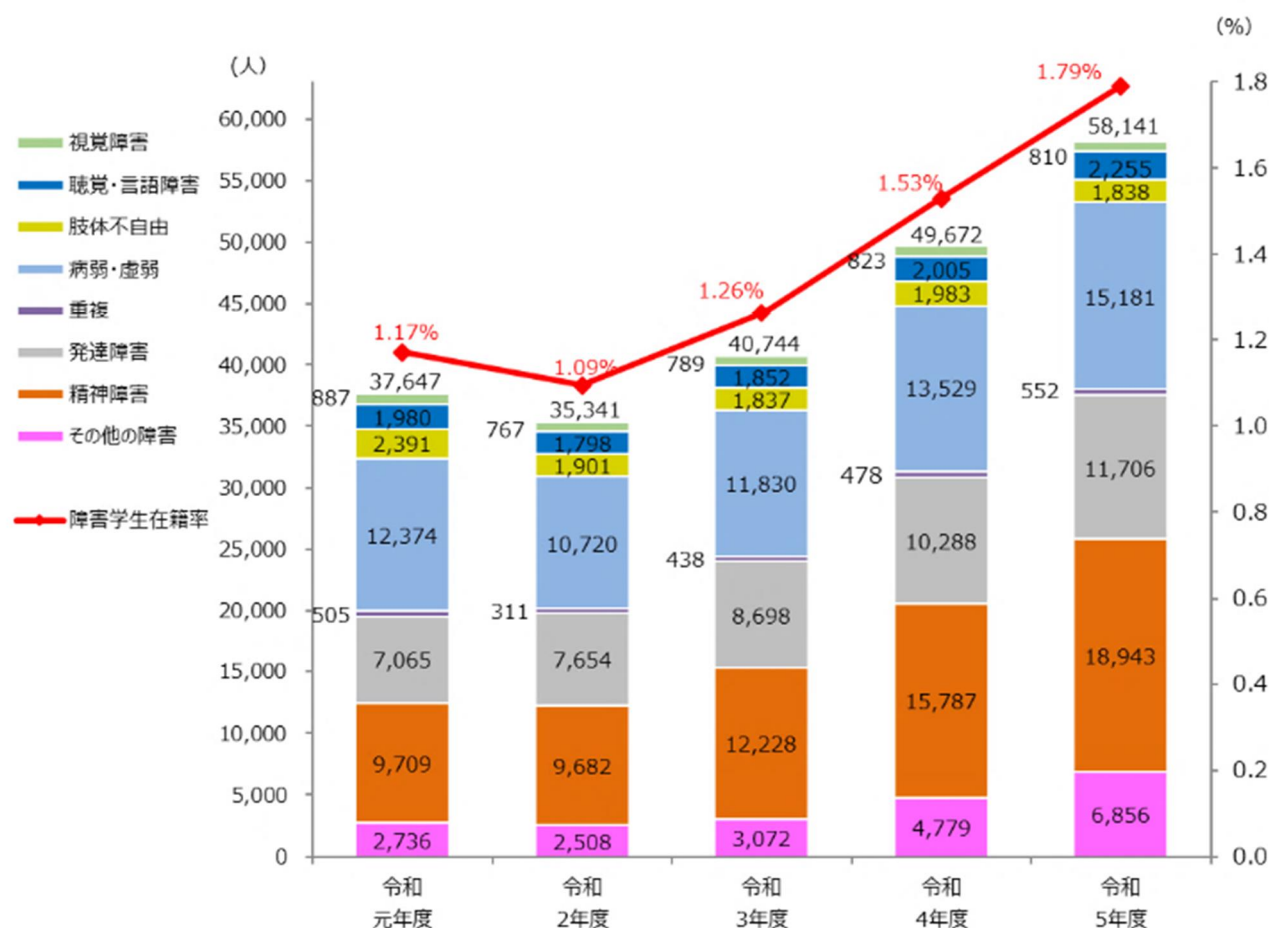
1. 目的: 障害学生の今後の修学支援に関する方策を検討する上で、全国の大学、短期大学及び高等専門学校における障害学生の状況及びその支援状況について把握し、障害学生の修学支援の充実に資する。
2. 対象: 大学(専門職大学、大学院、大学院大学及び専攻科を含む。)、短期大学(大学内に短期大学部を有している場合及び専門職短期大学、専攻科を含む。)及び高等専門学校(専攻科を含む。)
3. 調査方法: 悉皆調査(調査する対象を一部ではなくすべて調査する全数調査のこと)
4. 調査期日: 令和 5年5月1日現在
5. 基本情報: 全学校数1,168校、全学生数3,247,212人

II 主な調査結果

○障害学生数と障害学生在籍率

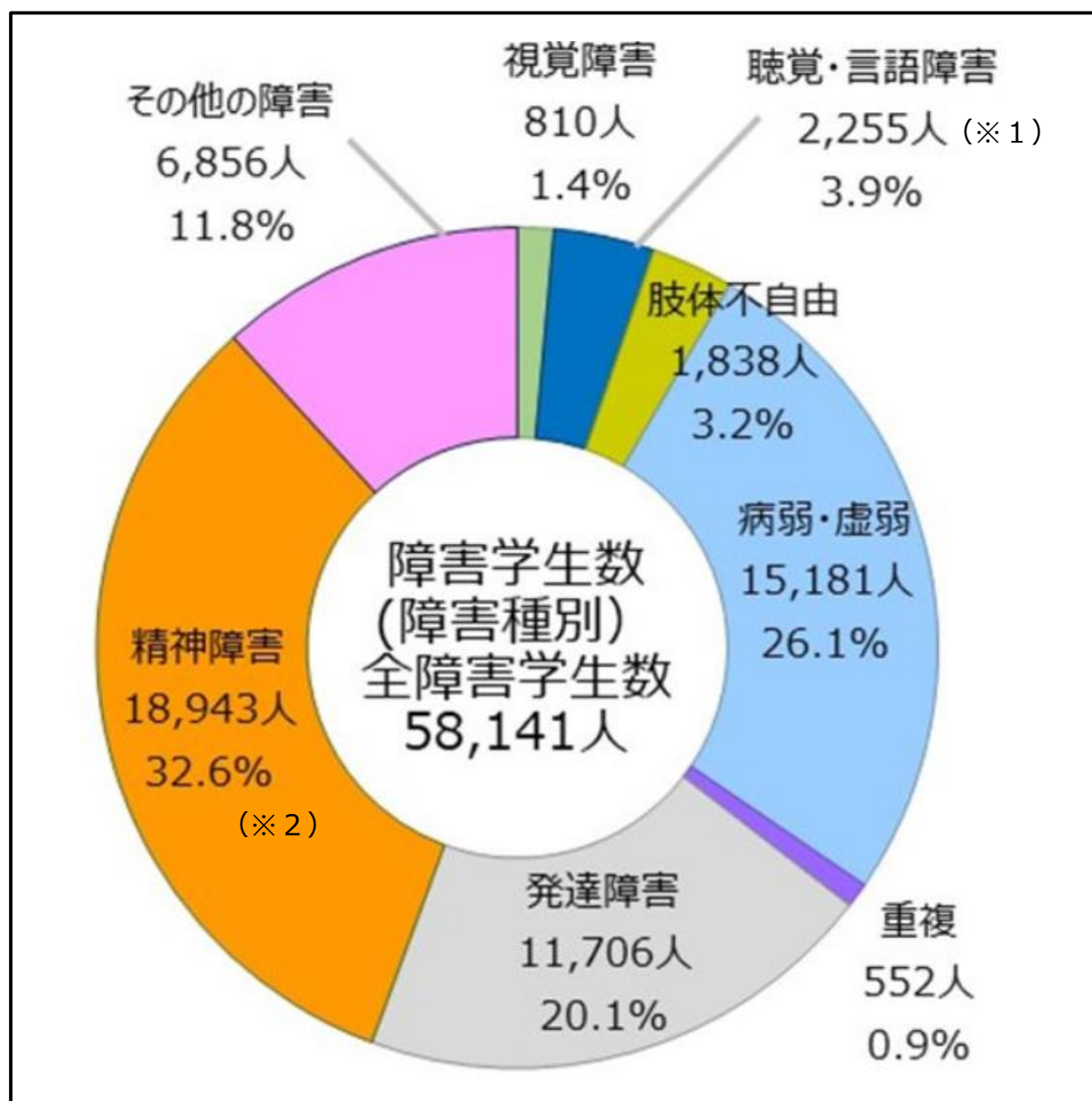
令和5年5月1日現在の障害学生数は58,141人で前年度から 8,469 人の増となった。

また、障害学生在籍率は1.79%で前年度から0.26 ポイント増加した。



○障害種別の障害学生数

令和5年度の障害種別の障害学生数について、「精神障害」が 18,943人と最も多く、次いで「病弱・虚弱」が15,181人、「発達障害」が11,706人となっている。



※1 聴覚・言語障害(2,255人)における「聴覚障害」の学生は2,183名(97%)である。

※2 知的障害の学生は、精神障害(18,943人)における「統合失調症等」「気分障害」「神経症性障害等」「摂食障害・睡眠障害等」「他の精神障害」のうち「他の精神障害」(3,559人、19%)に含まれている。

出典:独立行政法人日本学生支援機構(2024)「令和5年度(2023年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査」結果の概要について(一部改変)

https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afieldfile/2024/08/06/2023_press.pdf (最終閲覧日:2024年10月8日)

問題1

資料内にある障害種のうち、特別支援教育における視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由者又は病弱者(身体虚弱者を含む)の5障害領域のどれかを一つ選んで、

- (1)それはどのような障害なのか、
 - (2)その障害に応じた必要な支援がない場合は日常生活の場面と授業場面でどのような問題が起きうるのか、
 - (3)そのために大学等における障害学生支援ではどのような支援が必要になると考えるのか、
- の3点について400字以内で述べなさい。

問題2

資料では、障害学生在籍率が増加傾向であることが示されている。一方で、下の枠内にあるような結果も明らかになっている。障害学生支援率が55.0%となっている背景の1つとして、障害学生は、周囲から見て明らかに支援がないと授業に参加できないにもかかわらず、自ら大学等に支援を申し出ることをしない問題が現在も生じている。

資料内にある障害種のうち、特別支援教育における視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由者又は病弱者(身体虚弱者を含む)の5障害領域のどれかを一つ選び、自ら大学等に申し出ない問題について考えられる背景を多角的に考えて、400字以内で述べなさい。なお、問題1で選んだ障害種と重複してもかまわない。

○障害学生(※3)数(58,141人)のうち支援障害学生(※4)数は32,002人で、前年度(27,121人)より4,881人の増。

○障害学生(58,141人)に占める支援障害学生の割合(障害学生支援率)は55.0%で、前年度(54.6%)より0.4ポイントの増。

※3 「障害学生」とは、身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳を有している学生又は健康診断等において障害があることが明らかになった学生(重複する場合は実数)。

※4 「支援障害学生」とは、学校に支援の申出があり、それに対して学校が何らかの支援を行なっている障害学生(今年度中の支援予定を含む)。

出典:独立行政法人日本学生支援機構(2024)「令和5年度(2023年度)大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書」

https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/_icsFiles/afieldfile/2024/08/14/2023_houkouku_2.pdf (最終閲覧日:2024年10月8日)

令和7年度 宮城教育大学学校推薦型選抜

集団面接

【初等教育専攻】

問題冊子

令和6年11月23日 午後1時00分 ～ 4時00分

注意事項

1. 問題冊子は表紙を含めて3枚です。試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないでください。
2. 解答用の画用紙は合計3枚です。
3. 問題冊子に印刷不鮮明の箇所があった場合には申し出てください。
4. 下書き・メモ用に、白紙の下書き用紙を5枚配付します。適宜活用してください。問題冊子、集団面接実施方法、下書き用紙は回収しません。

令和7年度 宮城教育大学学校推薦型選抜

集団面接(初等教育専攻)

集団面接は3つのパートに分かれています。資料を読んで課題に取り組んでください。

資料は「環境省 図で見る環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書 平成27年版」から抜粋したものです
(資料 1、2) (全2ページ)。

第1パート

課題1

資料 1 を読み、人口100万人以上の都市に対して、その他の地方が抱える問題とその背景について、あなたの考えを画用紙の1枚目に簡単にまとめてください。

また、資料 2 を読み、東京圏における転入・転出超過の推移から読み取れる変化とその背景について、あなたの考えを、論点を絞って画用紙の2枚目にまとめてください。

課題2

課題1を踏まえ、もしあなたが小学校の先生だったら、資料 1、2 で取り上げられている問題にどのような形で関わることができると思いますか。それを選んだ理由と具体的な対応を中心に、画用紙の3枚目にまとめてください。

課題3の準備

後述する課題3のための準備をおこなってください。

第2パート

課題3(個人発表)

課題1と課題2でまとめた画用紙を用いながら、発表してください。一人の発表時間は3分です。

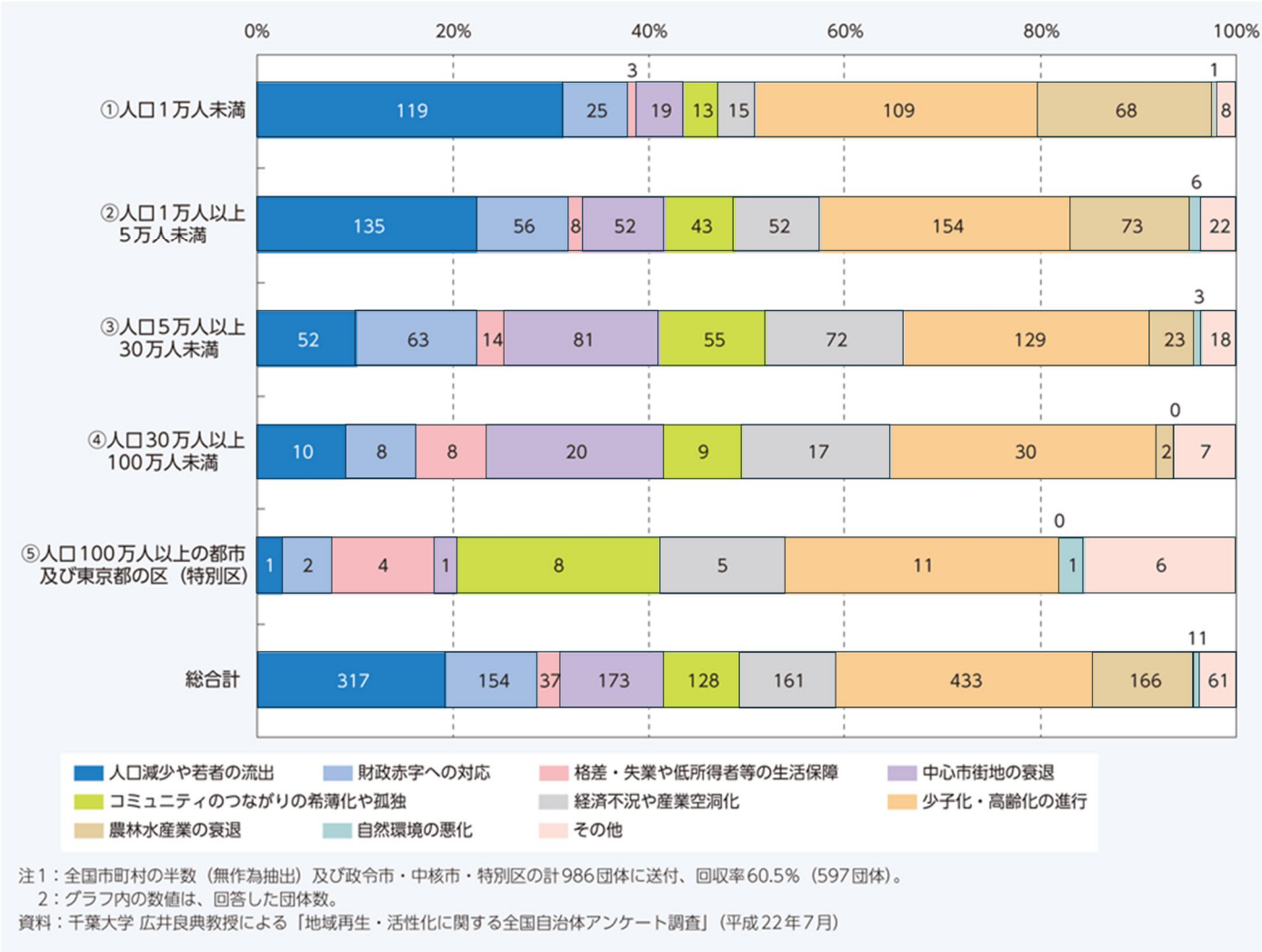
第3パート

課題4(話し合い)

課題3の個人発表を踏まえ、もしあなたが小学校の先生だったら、資料 1、2 で取り上げられている問題にどのような形で関わるができると思うか、話し合いをしてください。

資料1

地域が現在直面している政策課題で、特に優先度が高いと考えられるもの（複数回答可、人口規模別）



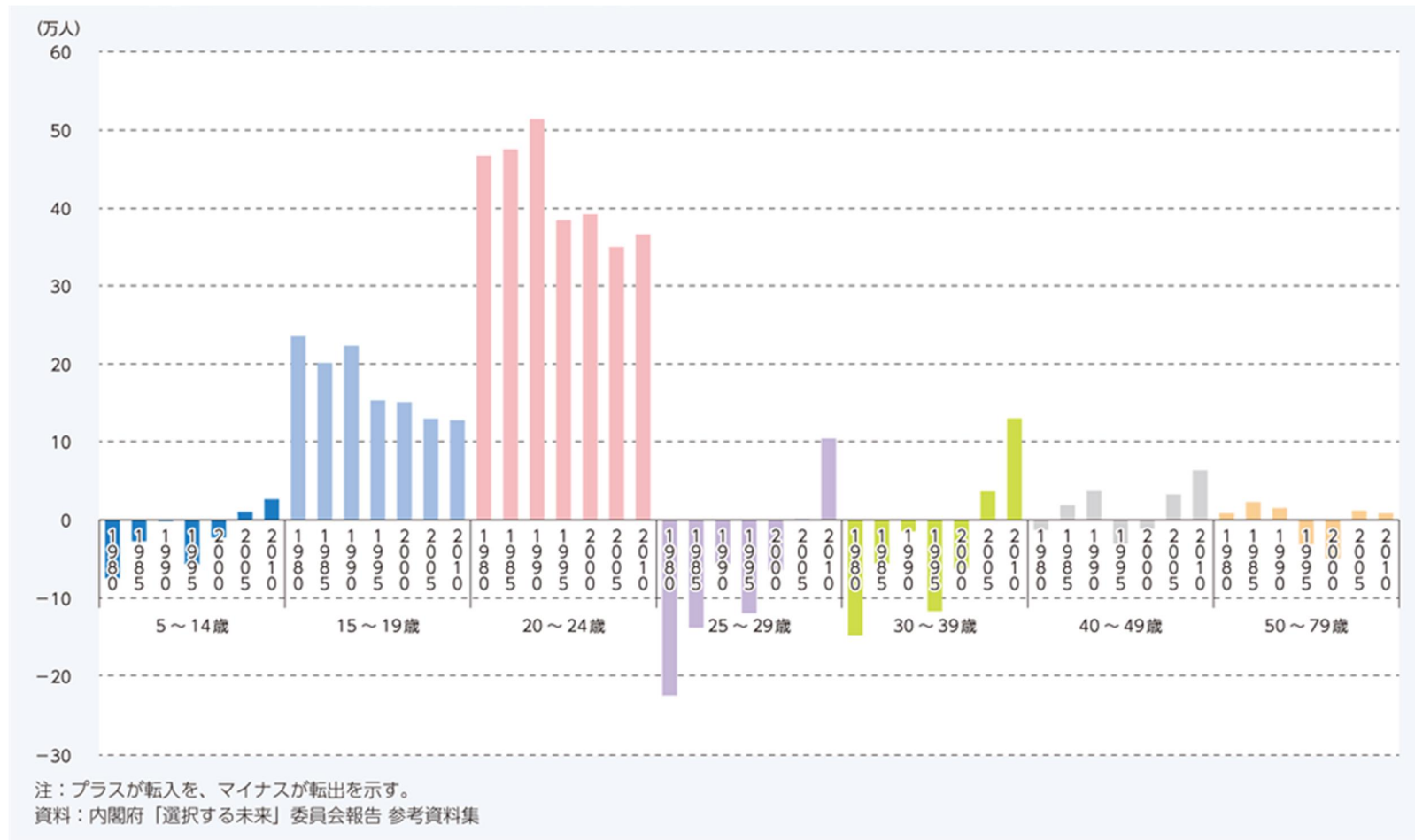
原図の枠線の一部を加工して引用

出典：環境省「図で見る環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書 平成27年版」

<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h27/index.html>（最終アクセス日 2024年10月3日）

資料²

東京圏における年齢別転入、転出超過数の推移



出典：環境省「図で見る環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書 平成27年版」
<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h27/index.html>（最終アクセス日 2024年10月3日）

令和 7 年度宮城教育大学学校推薦型選抜

特別支援教育専攻
集団面接課題

令和 7 年度宮城教育大学学校推薦型選抜

特別支援教育専攻 集団面接課題

試験時間：180 分（休憩を含む）

この場には、特別支援教育について学ぶことに関心があり、将来特別支援教育に携わる意欲と意思を持っている高校生が集まっています。そこで、皆さんに、特別支援教育に関する様々なテーマについて、自由に討論してもらいたいと思います。

その進め方は次の通りです。

ここに 3 枚のカードがあります。それぞれのカードにはテーマが 1 つ書かれています。どのカードを引くかは、皆さんに決めてもらいます。1 枚カードを引いたら、そのテーマを皆さんに示します。そこから、しばらく考えを整理する時間を取ります。メモを取っても構いません。

その次に、最初の発言者を決めます。ここにある箱には、1 から 11 までの番号の書かれた札が入っています。ここから私が 1 枚引くので、その番号の人から発言してください。その後は自由に討論してください。

時間になったら、討論を終了してください。そして、再び次のテーマ決めを行い、考える時間を取って、最初の発言者を決めます。この時、前に引いた番号を戻します。したがって、再び最初の発言者になる可能性もあるので気をつけて下さい。ただし、最初の発言者になるのは 2 回までとします。

3 枚のカードについて討論が終わったら休憩とします。その後の流れについては、休憩後に説明します。

1

もし特別支援教育が なかったら

特別支援学校や特別支援学級、通級
による指導がなく、障害の種類やそ
の程度にかかわらず地域の小中学校
などの通常の学級に通う制度だった
ら、学校はどうなるでしょうか。教
師の立場や子どもの立場など、様々
な視点から考えてみましょう。

2

知的障害者と選挙

民主主義の基本である選挙の権利は、誰でも平等に行使できなければなりません。「知的障害者と選挙」という課題を挙げた時、何について考える必要があるのでしょうか。

3

聴覚障害児と音楽科

音楽科教育、つまり、「音楽の授業」
を、聞こえない、聞こえにくい児童
生徒が学ぶということを考えてみま
しょう。